

茨城高等学校・中学校

## 校長室だより

2024年2月22日

ことばと生きる。ことばで生きる。

月1回の配信を目標に約3年間続けてきた校長室だよりですが、数えてみたら、前回の1月号でなんと通算30回を達成してしまいました。これってちょっとすごくないですか？30回ですよ、30回。鉄棒でけんすい30回できる人ってどれくらいいるでしょうか？（関係ないか？）

学校のHPに載せていることもあり、思いがけない方から突然「読んでますよ」と言われ、冷たい汗をかくこともあります。このあいだ、長年お付き合いのあった東京の教材関係の会社の社長さんから後を譲って退任することになったという連絡が来ていたので、長い間お世話になりました的なメールを送ったところ、その返信のメールの追伸に「先生のエッセー読んでます」と書かれていて、ぐわあーっ！となりました。

思いつくまま勝手なことを書いている割には、ありがたいことに概ね好意的な励ましのおことばを頂戴することが多いのですが、時々「高校生はともかく、中学生にはちょっと難しいんじゃないですか？」というご意見をいただくこともあります。そこで今回の校長室だよりは、思いっきりわかりやすく始めてみたいと思います。

げんごがく昔ばなし

むか～し昔、あるところに、“そしゅーる”というげんごがくしゃのおじいさんがいました。昔ばなしあるあるで、おじいさんといいましたが、そしゅーるは1857ねんに生まれて1913ねんにしんでいるので、じっさいにはおじいさんではありませんでした。

そしゅーるは、すいすのじゅねーぶというむらのだいがくでげんごがくをおしえていましたが、いつからか、ことばは「ものの名まえ」をあらわすという、でんとうてきなかんがえにぎもんをもつようになりました。えい語ではひつじのことを「しーぷ」といいます。ふらんす語では「むーとん」です。これらは、めーめーとなくしろくてむくむくしたどうぶつをさすことばです。ところが、たべものとしてのひつじの肉は、えい語では「まとん」にへんかしますが、ふらんす語では「むーとん」のままです。

そこでそしゅーるは、「あらかじめ“もの”があって、あとからことばが名まえをつけたのではなくて、にんげんは、ことばによってせかいに切れ目をいれて、名まえをつけることでせかいをりかいしているんじゃないかね？」とかがえました。このかがえかたは、のちに“こうぞうしゅぎ”とよばれるしそうのもとになったといわれています。

そしゅーるは生きているあいだ、一さつの本ものこしませんでした。しかし、そしゅーるがじゅねーぶだいがくでおこなった「いっばんげんごがくこうぎ」のじゅぎょうをうけたがくせいの一とがのこされていたため、そのしそうはのちのひとびとにうけつがれ

ることとなりましたとき。めでたし、めでたし。(注)

「いや、ひらがなばかりで、かえって読みにくいわ！めでたし、めでたしじゃないし！」という批判の声が聞こえてきそうなのでこのへんにしておきますが、ソシュールの言語学が提起した「ことばは“ものの名前”ではない」という考え方が、その後の言語学のみならず現代思想そのものに大きな影響を与えたのはまぎれもない事実です。

「ことばは“もの”の名前であり、ものの名前は人間が勝手につけた」という言語観は「ことばのまえに、名付けられる“もの”はすでに存在した」という前提にたっています。しかしこれでは、英語の **sheep**、**mutton** とフランス語の **mouton** の例は説明できません。ソシュールは、名付けられることではじめて“もの”はその意味を持つのであり、羊、風、勝利、笑う、愛する、悲しい、美しい、などのようにその対象を切り取って名付けることで、人間は世界を認識しているのだと考えたのです。

思想家の内田樹（うちだたつ）氏は、ソシュールの言語観を星座を例にあげて説明しています。「それは星座の見方を知らない人間には満天の星が『星』にしか見えず、天文に詳しい人には、空いっぱい『熊』や『獅子』や『白鳥』や『さそり』が見えるという事態と似ています。黒い空を背景にして散乱する無数の星のあいだのどこに切れ目を入れて、どの星とどの星を結ぶか、それは見る人の自由です。そして、ある切れ目を入れて星をつないだ人は、そこにはっきり『もののかたち』を見出すことができます。…中略…ソシュールは言語活動とはちょうど星座を見るように、もともとは切れ目の入っていない世界に人為的に切れ目を入れて、まとまりをつけることだというふうに考えました」

ソシュールのいうように、人間がことばによって世界を切り分け、それぞれのまとまりに名前をつけることで世界を理解しているとするなら、その人が用いる言語によって世界の認識のしかたも変わると考えるのが自然です。『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』ガイ・ドイッチャー著（ハヤカワノンフィクション文庫）は、そんなことばと認識に関わる問題を解き明かそうとする一冊です。内容はけっこう本格的な言語学の入門書なのですが、イスラエル人の著者のユーモアとウィットに富んだ口ぶりで、ことばの不思議が興味深く語られています。

『言語が違えば…』では、まず「色彩」の表現に関する問題について考えています。問題となるのは、古代ギリシアの詩人ホメロスによる叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』です。トロイ戦争を題材にギリシア神話にもとづいて書かれた、世界的な古典作品であるこの二篇の長編叙事詩には、現代人から見て不可解としかいえない色彩に関する描写が数々含まれています。その端的な例として「葡萄酒色の海」という一句がとりあげられています。ワインレッドの海なんて本当に存在するのでしょうか？

19世紀半ば、イギリスのある政治家が著した『ホメロス研究』をきっかけに、「葡萄酒色の海」について様々な解釈が試みられました。ホメロスは夜明けや日没時の海を描写したのだという説（残念ながら夜明け、日没に限定できる根拠はありませんでした）、海はある種の藻によって赤く見えることがあるとする説（そんな海ばかりじゃないよね）、文学的な効果をねらった詩的表現であるという説（？）、ワインの中には赤ではなく青っ

ぼいものもあるという説(???)、中には、古代ギリシア人の色覚は、現代人と比べてまだ十分に進化していなかった、などという説まで登場しました。

この論争に一石を投じたのはドイツの言語学者ラツァルス・ガイガーでした。彼は、古代インドの宗教詩『ヴェーダ』の空に関する描写に注目します。そして「太陽と朝焼け、昼と夜、雲と稲妻、大気と天空にみなぎる霊気など、余すところなく見事に描写されている」としながら、「しかし、ひとつだけ、ヴェーダが教えてくれないことがある。それは、空が青いということだ」と述べるのです。「空が青い」という記述が存在しないのは古代ギリシア語を用いたホメロスにもヘブライ語で書かれた聖書にも共通する現象でした。ガイガーは、これらの言語に現代の「青」をあらわすことばは存在していなかった、と結論づけたのです。

『言語が違えば・・・』の中で著者のドイッチャー氏は、アフリカやアジアなどの非ヨーロッパ文化圏で生活する人々の色彩に関する認識や表現が、ヨーロッパ人のそれと大きく異なっていることが明らかにした19世紀の研究の事例を数多くあげています。その中でも顕著なのは、青と緑の区別です。ある人々は、青を指すことばを持たず、青い色を「黒」または「緑」と呼んでいました。また、ある人々は、緑と青を同一の色と認識していました。この人々は、青と緑を区別するヨーロッパ文化に対して、濃さが違うだけの同じ色をなぜ違うことばで表現するのか理解できなかつたそうです。ちなみに日本でも「青信号(実は緑)」「青物野菜(もちろん緑)」など、青と緑の混用は多々見受けられます。

シベリアのチュクチ族は、色を表す単語を黒、白、赤の三つしか持っていませんでした。「黒」は、赤が混じっていない青、またはその他の暗い色、「白」は白やその他の明るい色、「赤」は赤と赤みがかつたすべての色に使われます。彼らはそれでなんら不便を感じていなかった、と書かれています。

これらの事実は、「人間は、ことばによって世界に切れ目を入れ、そのまとまりを名付けることで世界を認識する」というソシュールの主張を裏付けています。ある文化は、青、緑、黒を別の色として区別し、それぞれに異なる名前をつけました。ある文化は、青、緑、黒などの暗い色を同じものとしてひとくくりにしたのです。

ことばが人間の認識にあたえる影響は色彩だけにとどまりません。『言語が違えば・・・』では、前後左右に相当する語を持たず東西南北で位置を伝える人々や(「西のテーブルの南の端に置いてある」「つまみを東に回せ」)、男性名詞や女性名詞などのジェンダー体系をもつ言語が思考に与える影響(「ほら彼女はオスだ。胸に赤い斑点があるからね」※「鳥」が女性名詞の場合)など、さまざまな興味深い事例にもとづき、私たちが無意識に行っている認識や思考の根本的な部分が、ことばという文化的慣習に大きな影響を受けていることが述べられています。

さて、ひとつの言語は無数のことばが複雑な関係性を持ち、巨大なシステムを形づくって存在します。生まれたばかりの赤ちゃんには、もちろんそのシステムは理解できません。ところが赤ちゃんは、1歳前後では片言のことばを話し始め、2歳児にもなるとかなり上手におしゃべりができるようになります。ことばを話せるようになるには、その前にことばを理解できるようになったタイミングが存在したはずです。果たしてその瞬間は、どのように訪れるのでしょうか？

『言語の本質』今井むつみ・秋田喜美著（中公新書）では、人間の言語獲得のプロセスを「記号接地」を切り口に解明しようとしています。またまた難しそうな語句が出てきたぞ？と身構えた人もいるかもしれませんが、『言語の本質』の説明を読むとそんなに難しい話でもありません。

例えば、私たちが「メロンを知っている」という場合、「メロン。果実を食用にするウリ科の一年生草本植物。学名 *Cucumis melo* 」というような知識をいうのではありません。メロンという果実の色や模様、匂いや感触や味を知っているという意味です。しかし、もしも君がメロンを食べたことがなかったらどうでしょう？誰かに聞いたり、文章を読んだりして「メロンは、甘酸っぱくておいしい果物だ」という知識があったとしても、それはメロンを知っているということになるのでしょうか？仮に君がイチゴなら食べたことがあって「イチゴは甘酸っぱくておいしい」とう知識をもっていたとしたら、メロンはイチゴと同じようなものと考えてしまうかもしれません。

AIについても同じ問題が生じます。近年登場した生成AIは、まるでことばを理解しているかのようなふるまいをします。AIに「メロン」ということばと「甘酸っぱい」「おいしい」ということばを結びつけて学習させれば、「このメロンは、甘酸っぱくておいしいなあ」という文章を作成するのはお手のものです。カメラを搭載すれば、メロンの見た目も識別できるでしょう。しかしそれで、AIがメロンを理解したといえるのでしょうか？

『言語の本質』では「ことばの意味を本当に理解するためには、まるごとの対象について身体的な経験を持たなければならない」と述べています。視覚イメージだけでなく、触覚や味覚、そのふるまい方や行動パターンも含めて、身体に根差した体験にもとづいて対象を理解しているとき、「記号（＝ことば）」が対象に「接地」しているといえるのです。

記号接地問題を考えるうえで、大きなヒントとなるのがオノマトペです。オノマトペって何？という人のために説明しておく、いわゆる擬音語（「犬がワンワンほえる」「風が森をザワザワと鳴らす」）、擬態語（「日ざしがポカポカあたたかい」「地面がグラグラと揺れる」）のことです。☺が「うれしい気持ち」を表し、☹が「悲しい気持ち」を表すことをアイコン性といいます。このアイコン性は、言語を介さずに情報を伝え、受け取ることを可能にします。対象を音や感覚イメージで写し取るオノマトペはアイコン性が高く、子どもが最初にことばを理解する手がかりになっているのではないかと『言語の本質』では述べられています。

ことばの理解の入り口は、ことばという存在への気づき、つまり「まわりの大人が口に作る音声には、何かを指し示す働きがあるようだぞ」という気づきがあると想像できます。ことばの獲得について、『言語の本質』は「最初の一群のことばが身体に接地していればよい」とも説明しています。記号接地の働きによって、何かを指し示す音声（＝ことば）の存在に気づいた子どもは、最初のことばを手がかりに雪だるま式に知識を増やし、やがて巨大な言語システムを自分のものにしていくのです。

映画『奇跡の人』は、病気によって幼少期に視覚、聴覚を失ったヘレン・ケラーと、彼女にことばを教えようとするアン・サリバン女史の、実話にもとづく物語です。サリバン先生は、ヘレンの手に指で文字を綴ることで「ものの名前」を教えようとします。しかし、

ヘレンにことばの存在を理解させることは容易ではなく、彼女は動物のように泣き叫んだり、暴れたりすることでしか自分の感情を表現できません。サリバン先生の努力は、徒労に終わるかにみえました。そんなある日、井戸から水を汲もうとしたヘレンの手に冷たい水がこぼれます。すると、ヘレンは何かを思い出そうとするかのような表情となり、のどの奥から「ウー、ウォー…」と声を発するのです。それはヘレンが、手に冷たく流れるものに「ウォーター」という名前があることを理解した瞬間、ことばの存在に気づいた瞬間でした。

幼いころ、私たち一人ひとりに、ヘレンと同じような言語獲得の瞬間が訪れたはずです。それは私たちが、生物としての「ヒト」から社会的存在である「人」へと踏み出す瞬間であったに違いありません。残念ながらその劇的な瞬間は私たちの記憶から消え失せてしまっています。しかしその日、私たちは間違いなく「世界」を発見したのです。

日常の中で、ことばは常に私たちとともにあります。誰かと会話をするときはもちろん、昨日食べた夜ご飯を思い出すときも、次のテストはがんばるぞー！と気合いを入れるときも、ダンスの角に足の小指をぶつけて「いったー！」となるときも、私たちはことばを使っています。ことばが、単に情報をやりとりするための道具ではなく、人間の思考や認識の根幹に深く関わっていることは明らかです。

17世紀フランスの哲学者ルネ・デカルトは「我思う故に我あり」という有名な箴言（しんげん）を残しました。思いとはことばであることをふまえれば、「我」は「ことば」そのものであり、私たちの自我はことばによって形づくられているといえるでしょう。

人は一生のうちどれほどのことばを受け止め、どれほどのことばを発するのでしょうか。ことばは生きることの価値を意味づけ、希望や優しさを生み出す一方、自己や他者を傷つけ、憎しみや争いを生じさせます。私たちはどのようにことばと接し、どのようにことばを用いていくべきなのでしょう？ 広大なことばの海を前にした私たちの足下に、今も絶え間なくその問いは打ち寄せ続けています。

注) フェルディナン・ド・ソシュール。1857年 - 1913年。スイスの言語学者、記号学者、哲学者。「近代言語学の父」と呼ばれる。記号論の基礎を築き、その後の構造主義思想に大きな影響を与えた。

※「校長室だより」は、本校のHPにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、HPの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。